ECO（6/13）：持続可能な森林管理？むしろ持続可能な誤解か

長い間注目を集めてきたが、COP30議長国は今週、森林ロードマップのもと、森林減少・劣化を食い止め、その傾向を回復させるための計画概要を発表した。
ECOは森林減少・劣化における、より深い理解と適切な測定のための進歩的な取り組みが見られたことに、わずかながらも希望を感じた。だからこそ、政府が「持続可能な森林管理」と大規模な単一樹種による植林を森林減少・劣化の解決策として提案したとき、私たちがどれほど不安を感じたか、想像してみてほしい。

持続可能な森林管理は信憑性がない…。もし、これを天然林の適切な管理の基準として利用する場合、天然林の破壊の実態が隠れてしまうだろう。では、持続可能な森林管理のどこに問題があるのか？かなり「持続可能」に聞こえるが、実際には「持続可能な」という言葉が生態学的な持続可能性を意味しているわけではない。むしろ、木材の持続可能な供給に業界が注力していることを指している。

持続可能な森林管理は林業界が意図的に考案したものであり、政府の政策的承認を得て、森林への被害を隠すために使われている。現実には、森林にとって最大の被害のいくつかは持続可能な森林管理の名のもとに起きている。カナダの原生の針葉樹林やオーストラリアにある地球上で最も炭素密度の高い森林の破壊を合法化したり、何十億ドルもの低炭素のための政府補助金で、「持続可能な」森林を燃料として利用する大規模バイオエネルギーなど様々である。持続可能な森林管理は、カーボンニュートラル（炭素中立）と生物多様性の恩恵に関する誤解の上に成り立っている。実際には、持続可能な森林管理における伐採で平均炭素蓄積量は半減し、野生動物の生息地を消滅させ、森林生態系を危機にさらす。

真に持続可能な森林の管理であれば、森林が天然林か単一樹種による植林地かによって、柔軟に対応することで森林減少・劣化を食い止め、回復させる。天然林における課題は、一次林や原生林で見られるような高い生態系の健全性を保つこと、産業的な森林伐採で被害を受けた森林の生態系を回復することである。植林地においては、農薬及び肥料への依存の低減、河川の自然植生の保全や回復、野生生物の生息地域の連結性を確保することなど、適切な管理が必要だ。持続可能な森林管理はこれらを一切行っておらず、森林の劣化を確実に食い止めるものではない。

これは単なる生態系の問題ではなく、公平性の問題でもある。持続可能な森林管理はグローバル・ノースにおける伐採手法の総称となっている。もし、富裕国で持続可能な森林管理が実施されれば、持続可能であるとみなされ、称賛される。しかし、その結果、グローバル・サウスにおける森林伐採に不当な注目が集まることになる。南の先住民族、アフリカ系の人々および地域社会の権利を補償するための措置は、何ら講じられていない。
持続可能な森林管理は、生態学的に持続不可能な伐採と不公正な慣行を助長するトロイの木馬のようなものだ。ECOはいかなる「森林ロードマップ」は、持続可能な森林管理を含まず、距離を置くべきだと提言する。森林劣化を明確に定義できて初めて、私たちは生物多様性を保全し、生態系の健全性を高い水準で維持し、レジリエンスを構築するような方法で森林管理の成果を評価できるようになるのである。